



宮崎市文化財調査報告書

石神弥生遺跡調査概報

昭和46年3月

宮崎市教育委員会

正 誤 表

誤	※	正
1, P3 - 6行	重要な遺物を	重要な遺物を
2, P5 - 第4圖	耕 [※] 地層	1耕土層
3, P6 - 1行	ITB1 2区	ITB-2区
4, P6 - 4行	"	"
5, P6 - 1行	試掘○内 [※]	試掘坑内
6, P10 - 2行	わが國は	わが國に
7, P8 - 17行	「九州的な性格の……」の前に下記の文章をそう入	

「裝飾は残存するかぎり脚部にのみ見られる。
すなわち口縁に近接する位置にあぐらした突帯とその上下に二枚の刺突列を施し、更に中央部に長方形の空孔を持つものである。脚部染線の彫形状、一般の面取りによつて口縁部のヘラケスリに共通する手法がうかがえる。出土の土器のうち、この高杯がもつとも良好な器成であつて、堅軟な器壁も特徴的である。
カメ椀に使用されたカメ形土器は、逆八字形口縁をもつて、大型突帯を口縁直下にめぐらすものであるが、突帯頂部の内くぼみや、下端のヘラケスリによる修整に特徴が指摘される。口縁上部の中央部も、突帯の頂部と同様の内くぼみである。底部は平底の安定したものであつて、いわゆる洗面器形断面をもつ器部である。
これらの土器を調べてみると、一般的に指摘されるのは、九州において弥生時代前期末より中期にかけてみられた下様式や、その系譜の中に位置づけられる一部の土器と、同」

はじめに

最近の土地開発事業は日に日に進み、次第に大がかりなものが行なわれ、重要な文化遺産が破壊されたり永久に地下に埋没させてしまうといった例が多くなり、又、工事中に遺物や遺跡などが発見されても無届けのまま済まされるといった傾向にあり、文化財の危機として憂慮されております。

さきに県において石神遺跡の緊急調査を行いましたはその時の状況からみて、その隣接地にも遺物、或いは遺跡が発見されることが予想されたので土地開発工事等により破壊される前に調査を実施しておきたいと考え12月25日から3日間、県文化財専門委員、石川恒太郎氏と市文化財審議委員鈴木重治氏の手によって予備調査を実施しました。本調査は昭和46年度において行なうことによりますので今回はその概報を刊行することにしました。関係各位の参考となれば幸いです。

昭和45年3月20日

宮崎市教育委員会

宮崎市石神遺跡調査報告書

第一、遺跡の立地条件

宮崎市の御地方は大淀川の北岸で河口に近く、日向灘に面するところである。海岸線は屈曲がなく、ほとんど直線をなしており、その西方に国道10号線と日豊本線が海岸線に平行して南北に走っている。この国道10号線以東の地理的状況は図版2に示す通りで、この図は国土地理院発行の5万分の1の地図によって作製したものである。

この地は日向灘でも特に赤江灘と呼ばれる荒海である。それで大淀川の河口は、川によって運ばれた土砂が、この荒海で打ち返されて河口に積もり、北から南に細長い砂嘴が形成され、その西側に南から北にツ業の入江が湾入している。このツ業入江の西側はいわゆる白砂青松のツ業浜で、入江の北端近くに鎮座するツ業稲荷神社からさらに北方に続いて防潮保安林のある砂丘をなしている。このツ業浜の砂丘の西側にはまた南より北に細長い水田があって、その北端は山崎に達している。またこの水田の西側には、山崎から阿波岐原町に至る細長い砂丘が北から南に伸びており、その西側にはまた細長い水田が南から北に入って

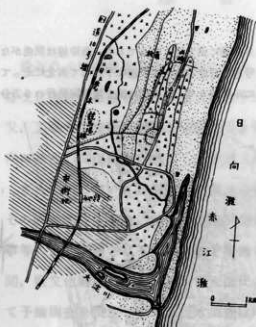


第1図

おり、その北端は山崎の西方に達している。さらにまたこの水田の西側には村角から浮之城に至る細長い砂丘が北から南に伸びており、この砂丘の南の突端に市立豊中学校がある。そしてその南には源を池内に発し、村角と大島の間を流れ、新別府と吉村の界を東南流してツ業入江に注ぐ前川がある。そしてこの砂丘の西側には前川の流域に形成された水田が広がっている。

このように、この地方は北から南に伸びる細長い砂丘と、南から北に伸びる細長い水田とが交互に挟み合っていて、これらの砂丘と水田とは、どのようにして形成されたのであろうか。この事実をもっとも明瞭に説明するものが、ツ業の砂嘴と入江であろうと思う。今日のツ業入江の底はどろどろとなっているが、山崎の東側に入っている水田の北端の北部に江田神社裏の池があり、その池と水田との間は湿地で葦などが生えている。これは嘗てこの水田が入江であったことを示すもので、この水田は今の入江の前身であって、現在防潮保安林のある砂丘がその時代の砂嘴であったわけである。このことは山崎から阿波岐原町に至る砂丘とその西方の水田と関係を示すものであり、ま

第2図 檀地方砂丘水田分布



たその西方の村向より浮之上に至る砂丘とその西方の水田との関係を示すものと考えられる。

わが国の海岸は、縄文早期の海退以来、次第に海岸が遠くなった(海退という)ものといわれているが、特に日本の太平洋岸は海岸の堆積が多いといわれている。それにこのような現象をもたらしたのは大澗川の河川の変化も考えねばならない左の図に示した前川(大澗川ともいう)は、今日小さい川となまっているが、大島附近に池が多く残っていることなどから考えて、古くはこの川が大澗川の本流であったのではなからうか。そう考えると、これらの砂丘と水田との関係がさらによく理解されるし、その西に大島という地名があることも興味を引く。いずれにしても、このような海退現象と赤江灘による海岸の堆積現象によって、これらの砂丘と水田が形成されたことは疑うことはできない。私はそれで現在の一ツ葉の砂嘴を第1砂丘、一ツ葉浜の防漕林のある砂丘を第2砂丘、その西側の山崎から阿波岐原町に至る砂丘を第3砂丘、その西方の村向から浮之城に至る砂丘を第4砂丘と名づけているが、これらの砂丘のうち、第3と第4の砂丘は何れも東側は断崖状をなし、西側は緩斜面をなして水田に続いている。これはこの地方は冬期の西風が激しく、黄塵万丈の状況を呈するので、西側の砂が吹き上げられた結果と思われる。第1と第2の砂丘は形成後まだ年月が浅いのでこのようになっていないであろう。

さてこの砂丘上における考古学上の調査を試みれば、最も注目されるのは第4と第3の砂丘であって、第1砂丘にはもちろん遺物の包含はなく、第2砂丘は北部江田神社付近に若干の遺物を包含している程度である。

第4砂丘の南端に位置する市立徳中学校の校庭から板付式と呼ばれる弥生時代前期の土器や甕棺を出土し、これらの遺物は同中学校や県立総合博物館に保存され、学界においても著名な事実である。またこの学校の北方に当る浮之城からも、朝顔形口縁をもつ大形の甕などが発掘され、この附近一帯の砂丘が弥生時代前期から中期にかけての包含層であることを示している。

第3の砂丘には宮崎市の市街地から新別府山崎を経て住吉に至る道路が砂丘を縦貫して走っており、この道路上、山崎の南方向約700mのところを標高10.2mを示す三角点がある。この三角点附近から阿波岐原町に至る丘地については、筆者は昭和28年以來屢々表面採集や一部試掘によって包含の状況(註1)を調査し、その概略を「考古学雑誌」に公表したことがある。その後の調査を併せて観察すれば、

この砂丘はこの地方でも、もっとも豊富な遺物の包含地であって、従来発見されたものは石器では磨製石斧、磨製石鏃、打製石鏃、石オ、軽石製浮子、石刃破片砥石など、土器では大形甕棺、朝顔形口縁の甕、埴、深鉢、高杯などで、土器は腹部が彫れ、底が細い弥生中期のものが多い。中でも大形の甕棺は巨大な突帯を二条ぐらゐめぐるものであるが、いわゆる須玖式の甕棺とは口縁その他において若干の相違を示している。さらに石オは先きが折れたので、これを磨いで石斧に代用したらしいが、福岡県筑紫郡筑紫村出土のもの(註2)と其の軌を一にしている。このように重要な遺物を数多く包含しており、この砂丘の学術的価値はすばらしいもので、今後の調査が期待される次第である。

註1. 石川恒太郎「宮崎市阿波岐原砂丘遺跡」(考古学雑誌、第43巻第4号、昭和38年3月)

註2. 河出書房刊「日本考古学講座4」(弥生文化、207頁真駒第6図による)

第二、予備調査の経過

A 緊急調査の経過

先に述べたごとく、第3砂丘はもっとも遺物の包含の多いところであるが、最近北方の住吉に自然動物園や国際ゴルフ場などが開発されたため、この砂丘を南北に縦貫している道路は忽ち観光の道路として脚光を浴びることとなり、道路沿線の土地は急速に開発されるに至った。昭和45年7月6日たまたま鈴木重治氏が通行中、阿波岐原町寄りの畑が開発されようとしており、土器の破片が夥しく掘り出されているのを見て宮崎市教委社会教育課に報告したので、小田係長と野間主事補、鈴木、石川両文化財審議委員が現地を調査した結果、県教育委員会にも報告し緊急調査を行うこととなった。

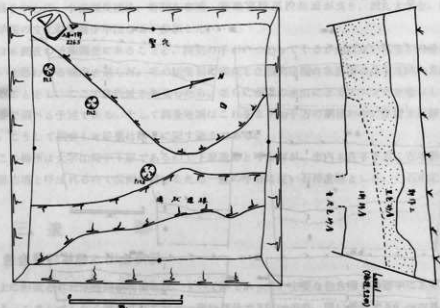
現場は興運運輸株式会社が事務所を建設することであったので、2日間延期を求めて快諾を得、7月8・9両日県市教育委員会共同で緊急調査を行なった。調査は泉岡から石川(文化財専門委員)茂山(県立博物館主事)市岡から鈴木重治(文化財審議委員)小田係長、野間主事補、安樂勉(宮崎高校教諭)沢屋臣(九大学生)その他の参加で行ったが、何分時間がないので、現地に道路にはほぼ直角に東西に長く巾2m長さ19mのトレンチを設け、これを中心にして発掘した。そしてこのトレンチを2m区切り10区に分け、東からA、B、C、Dと名づけたが、道路に近いA区とB区にはほとんど遺物はなく、C区以下に遺物が認められた。それで遺物のある所に発掘を集中した結果、AグループとBグループの2つのグループとした。

これらの遺物は、何れも甕棺と埴その他の土器で、両グループを合せて4基の甕棺を含む弥生中期の土器であったがAグループからヤリガナの穂先と思われる小さい鉄器を発掘したことは大きな収穫で、宮崎県で弥生中期の遺跡から鉄器を発見したのがこれが最初である。また附近に墓穴住居地の一部と想像されるものもあったが、時間のない緊急調査であったからこれを調査することはできなかった。

B 予備調査の経過

このように左の緊急調査の結果、この遺跡の重要性はいよいよ確認されたが、急速に迫りつつあるこの地方の開発から、この遺跡を守るためには、とも角事前に徹底的な学術調査を行う必要のあることが確認された。それで宮崎市教委ではその前提として遺跡の予備調査を行うこととなり、昭和45年

第5図 N E-2区に於ける遺構検出状況



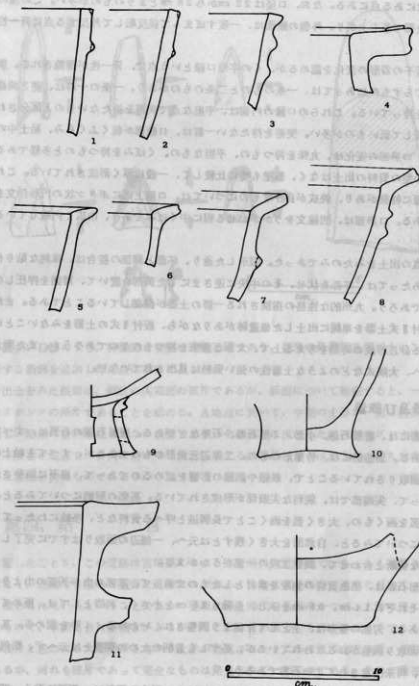
が明瞭ではなく、整地のための破壊がひどい。B地点に於ける竪穴はN E 2区試掘内で検出されたものであり、完掘されていないが、隅丸方形のプランを持つことが想定された。この竪穴の側面の外側には、小柱穴が並び、外柱のめぐる竪穴のうかがわれている。なお、この竪穴の内部からは、大型の土器片の出土をみた。溝状遺構もN E 2区内で見出され、縁に若干の乱れを認めしたが、30cm内外の巾をもって竪穴住居址の東側を走っている。この位置は、砂丘の頂部に寄った部位であって、降雨時に於ける竪穴内への流水を防ぐための遺構ともみられるが、詳細については継続調査の結果を待つべきであろう。これらの遺構を通じてみると、A地点に於いては、甕棺を主体とした墓域が拡がり、B地点に寄って住居地帯が分布する遺跡であることが理解される。更にこれらA・B両地点の西側には、砂丘の後背地として低湿地が控えており、旧い入江が考えられる。このあたりに寄って、土器片の散布する地点があり、仮りにC地点と呼ぶが、ここに住居地帯に隣接した耕作地の存在が想定される。

四、遺物

1 土器

出土の土器には、甕、鉢、壺、高坏があり、量的には、甕、鉢が多く、壺、高坏は少ない。
甕は、突帯を持つ点に1つの特徴が指摘される。口縁直下にD字状断面の突帯を一条めぐるものと、二条めぐるものがある。一条のものについては、突帯上に刻み目を持つものが多く、口唇部外側縁にも同じ手法の刻み目が施される。二条突帯の一群は、砂粒を多量に胎土に含むものが多く、

第6図 出土の土器



器面が粗い。一条突帯のものは、突帯の下部から胴部にかけて、へけによる器面調整痕が縦位に並列しており、焼成は良好であって器壁も堅硬である。口唇部の特徴は、共に口唇外側の端縁が、内側の端縁より下位にある点にある。なお、口径は22 cmから28 cmだまりのものが多い。この種の土器の底部は、中央部で若干上がり、外側の断面は、一度すぼまっても後反転して外反する点に齊一性がみられる。

鉢には、若干の器形の変化を認めるが、くの字形口縁という点で、齊一性が指摘される。胴部上半に突帯をめぐらすものにあつては、一条のものや二条のものがあり、一条の一群は、壺と同様に突帯上に刻み目を持っている。これらの口縁の内側は、平坦な点で突帯を持たないものと区分され、器高も口径に比較して低いものが多い。突帯を持たない一群は、口縁部が軽くふくらみ、胎土中の砂粒もやや大きい。口唇部の変化は、丸味を持つもの、平坦なもの、くぼみを持つものも多様である。

壺には、小型の資料の出土はなく、器壁も壺に比較して、一般に厚く形成されている。これらは、逆L字状口縁に特徴があり、焼成が良好なものについては、口縁上部にボタン状の円形浮文を貼り付けた資料がある。口唇部は、凹線文をうかがわせる程に中くぼみであり、巾広く内彎している点も特徴的である。

高杯は一点の出土のみであった。図示した通り、杯部と脚部の接合は、単純な貼り付けである。整形にあつては、杯部を伏せ、その中央に逆さまにした脚部を置いて、周囲を押し込んだら接合したものであろう。九州のな性格の指摘される一群の土器が混在していることである。また本遺跡の近くに板付Ⅱ式土器を単純に出土した遺跡跡がありながら、板付Ⅱ式の土器をみないことは、宮崎平野に於ける砂丘形成の時期を考える上で、大きな意味を持つものなのであろうか。また南九州のな土器とは云へ、大隅式などのような土着性の強い資料は見出されていない。

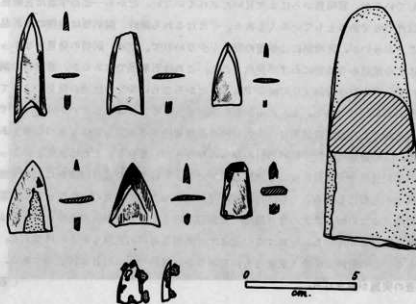
2 石器及び鉄器

出土の石器には、磨製石鏃、小形ノミ形石器、石斧などがある。磨製石鏃の石質は、すべて緑灰色の滑板岩である。形態的には、竹葉形のもの、二等辺三角形のものなどがあり、すべて主軸上に溝を持ち、左右に面取りされていることで、鉄鏃や銅鏃の影響を認めるのであって、扁平に調整されていることも手伝って、尖端部では、鋭利な尖頭部が形成されている。基部の形態についてみると、平坦なもの、若干弧を画くもの、大きく弧を画くことで長脚鏃と呼べる資料など、多岐にわたっている。一例の未製品についてみると、自然面を大きく残すとは云へ、一個辺の面取りはすでに完了しており、基部の単純な切断と合わせて、調整工程の一部がうかがえる。

小形ノミ形石器は、黒色頁岩の剥片を素材としたものであって、基部の巾が刃部の巾より大きい台形を呈し、それぞれ1.4 cm、0.8 cmを示し、長軸も2.5 cmと小さく、利器としては、極めて小型に属するものである。刃部の整形は、主として片側より調整され、いわゆるノミ形を認める。基部の端縁は、細かく面取り調整がおこなわれているが、必ずしも着柄のための調整とは云へず、類例の少ない資料でもあり、将来注意されたい石器であらう。

石斧は砂岩製の資料が出土しているが、断面カマボコ状を呈する資料は、刃部に近く一部を欠いており、基部のみを残しているが、器面調整は良好である。

第7図 石器及び鉄器



以上の数少ない石器のうち、特徴的な資料は磨製石鏃であり、従来の発掘調査例が少いこともあって中期に属する新例を追加し得た点は幸いであった。

一点の出土をみた鉄器は、鐵状の尖端部の破片であるが、断面について観察すると、一面にソリを認め、ヤリガンナの断片であることを認める。A地点に於いて、中期の土器が一面に散在する地区があり、新しい時期の資料を混じえない状態であり、その直下に出土したこのヤリガンナは、中期の后期を下限とする点で、日向に於いては最古に属する鉄製品であるばかりか、南九州の鉄製品としても重要な意味を持つものであろう。(鈴木重治)

第四、結 言

以上に記したごとく、この遺跡は宮崎県における弥生時代の遺跡の中で、もっとも重要な遺跡であるばかりでなく、九州でも極めて重要な遺跡なのである。それは第一右に述べたごとく、ここには壺棺が多く埋められているということである。壺棺は弥生時代の墓制の一つで、大形の壺に死体を納めて葬ったもので、単壺と合口壺棺とがあるが、ここにはその両方のものがあるようである。宮崎県下で壺棺の破片と思われる大形突帯を有する土片が発見されたところは延岡市差木野、西部市、清武町加納があるが、何れも破片であつて完全なもの発見されていないのである。それで現在のところ積極的に発掘して壺棺を見出し得る遺跡はここ以外にはないと思われる。

それでは壺棺の発見はなぜに重要であるかというに、壺棺はもとより人を納めて葬った棺であるが、

人ともいろいろな物が副葬されていることが多く、特に銅鉢、銅剣、藍鏡などの銅製品や鉄剣その他の鉄製品が副葬されていることがある。わが国における銅鉢や銅剣は九州北部に中国、四国の西半まで分布しているが、宮崎県からはまだ見いだされていない。だから一部の学者は宮崎県の古代は青銅文化圏以外の地であるとしている人もある。それはこれら銅鉢、銅剣類は甕棺の副葬品として見出されることが多いが、宮崎県には甕棺の発見が少ないので、銅鉢、銅剣の発見がなかったのである。しかもこの遺跡からは前に石才が発見された。これは石製品ではあるが、青銅器の銅才を石で模造したもので、その形は青銅文化の象徴である。だからさらに多くの甕棺の発見によって青銅器の発見の可能性があるわけである。もちろん鉄器の問題も併せ考えねばならないが鉄器はすで見いだされている。それでこの遺跡の研究は、古代日向の高低を決する重要な意味をもつものである。

さらにまた、この遺跡は弥生中期の農村の集落の存在を示してをり、それは水田を伴っている点から静岡県登呂遺跡や大分県安国寺遺跡と似ている。それでこの遺跡の調査によって当時の農村と水田の関係を明らかにし得るとともに、灌田の発掘によって木器発見の可能性もある。宮崎県では木製の器具の発見はないが、前記の登呂遺跡や安国寺遺跡または奈良県唐古遺跡などからは灌田から木器が数多く発見されている。それでこの遺跡では木器発見の可能性もまたあるわけである。

以上のごとく、この遺跡は極めて重要なものであるが、破壊の手は日に伸びつつある。それで早急に学術調査の実施が望まれる。

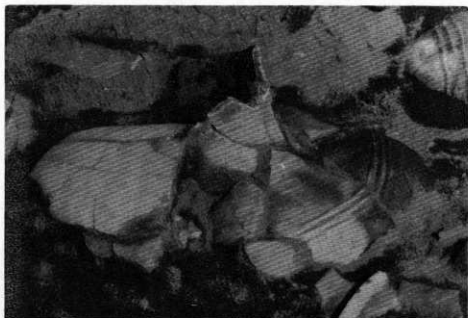
(石川記)



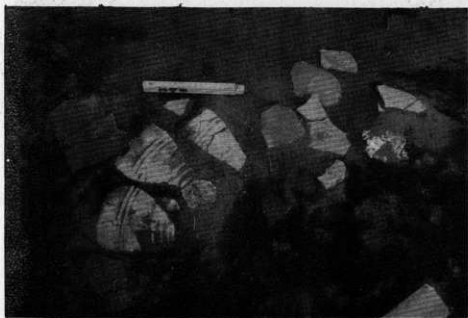
図版1 石神遺跡調査



図版2 カメ棺出土状況



図版 3 土器（弥生中期）出土状況



図版 4 土器（弥生中期）出土状況

発掘参加者氏名

石川 恒太郎（担当）

鈴木 重治（担当）

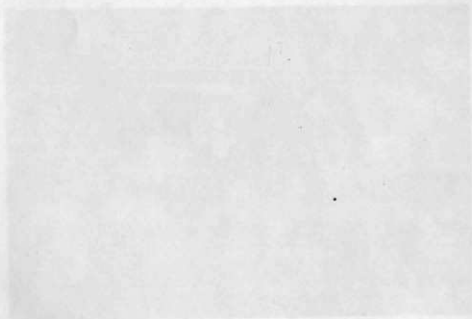
安楽 勉（他3名）

大宮中学校文化財愛護少年団

樟中学校文化財愛護少年団



1957-12-19 10:00 AM



1957-12-19 10:00 AM